

審査論文の要旨

本論文は、15世紀における室町幕府の権力構造とその展開過程の解明をめざし、京都と地域権力との間に取り結ばれる都鄙関係に注目しつつ、大名一門を出自とする室町殿側近や大名被官が担う役割について考察するものである。

従来、室町幕府の構造は、室町殿が在京直臣と分国支配を担う守護を編成・統制するという枠組みで議論されてきた。これに対し本稿は、分国支配を超えた在京活動を展開し都鄙関係を支えた大名庶流家や大名被官の動向を組み込んで、室町幕府の権力構造を描こうとする。

序章「室町幕府権力研究の現状と課題」は、研究史を総括した上で、在京政権として室町幕府を位置づけ都鄙関係を重視すること、室町殿の権力構造に大名一門と大名被官を組み込むことの意義を述べる。

第一章「足利義教政権期における幕府―地域権力間交渉の展開」では、義教政権期における幕府―地域権力間交渉を担った取次役の変遷を論じた。同政権前期に管領・諸大名・三宝院満済が担った取次役は、地域紛争が多発する政権後期には、管領と室町殿側近が連携して担う形に転換したことを指摘した。義教の専制政治が、管領・側近の両者を組み合わせて行われていたものであったことを解明した。

補論「勝鬨院院主と大友氏・九州・遣明船」では、満済と豊後大友氏との交渉を担う禅僧の人名比定を通じて、絶海中津にはじまる靈松門派が京都の領主による地方荘園経営や遣明船経営などの都鄙関係を担っていたことを明らかにした。

第二章「細川持賢と室町幕府」では、京兆家と庶家からなる細川一門のうち、非守護でありながら一門のなかで重きをなした庶家・典厩家の祖である持賢の活動を検討した。持賢が京兆家の後見として細川一門を支える一方、室町殿側近として取次役を務め、幕政に関与していた事を明らかにし、細川氏権力の中枢にまで室町殿・幕府との関係が強固かつ不可分に組み込まれていたと評価した。

第三章「細川典厩家の成立過程」では、持賢から成賢・政国へと養子継承が続いた典厩家の成立過程を検討し、室町殿・京兆家当主・細川一門など周辺の意向や当該期の政治状況を背景に人工的に創成された過程を描き出し、典厩家が細川一門と幕府という相互の関係に規定されて成立したことを解明した。

第四章「畠山政近の動向と畠山中務少輔家の展開」では、畠山一門で室町殿近習を務めた中務少輔家の成立過程を検討した。応仁・文明の乱期の当主政近は西幕府に属し、明応政変後は義材とともに流浪しつつ上野介の官途を得て立場を回復する。政近の子孫は二つに分かれるが、上野介の官途は室町殿近習に、中務少輔の官途は畠山宗家との関係を強め

ていく。大名一門を出自とする近習にとって、將軍権力と大名権力は択一のものではなく、一方との関係強化が他方との接点を生じさせたと言義づけた。

第五章「細川京兆家被官安富智安の実名をめぐって」では、大名被官の一事例として讃岐国守護代を務め、東寺領備中国新見莊代官として知られる細川京兆家被官安富智安を取り上げ、文芸活動、国衙領経営、新見莊三職の被官化などの多様な側面を明らかにした。

第六章「大名被官と室町社会」では、大名被官の活動を、在京奉公と都鄙関係の視点から論じ、室町領主社会に位置づけることを試みた。大名被官は、政治的・経済的・文化的な活動において大名への様々な在京奉公を行い、その関係が室町殿—大名の在京活動と連鎖していたこと、大名被官は在京奉公の連鎖の構造のなかで、個々の大名家や公武を越えた諸関係を取り結んだことを指摘した。また大名被官は、分国のみならず分国外での代官請負や取次役の実務を行うなど、都鄙関係の結節点となっていたと評価した。

終章「本論文の成果と今後の課題」では、各章の成果をまとめる一方、室町幕府権力の全体構造やその形成過程の段階差が不明確である点を今後の課題としている。

以上、大名の一門を出自とする室町殿側近・大名被官の在京活動と都鄙関係について論じ、室町殿権力と大名権力に両属する室町殿側近の在り方を、室町殿と大名との相互補完の構造の反映と位置づけた。室町幕府権力は、室町殿による守護の直接編成だけでなく、大名庶流家や大名被官という直接編成の周縁にあった存在の多元的な活動によって成り立っていたとまとめている。